館報

No.4　1977.6.15

大阪外国語大学附属図書館

# 学舎移転にともなう附属図書館および語学教育研究施設の建築設計基本要綱

昭和52年２月

大阪外国語大学将来計画委員会

## はしがき

以下は本学の附属図書館関係諸施設（LLをふくむ）の当面するいくつかの問題点の指摘を通じて，今後の――とりわけ学舎移転を契機としての――発展方向を明らかにしようとしたものである。図書館自体については，やはり資料収蔵装置の機械化の問題が中心となるが，ＬＬについては，本学における外国語教育研究の重要な機能的中心ということよりして，若干新しい構想をうちだしたつもりである。（本文Ⅰの3,4）今後さらにほりさげた検討をのぞみたい。

ともあれ，以下各項の要点について，本学教官職員各位をはじめ全体の積極的な支持協力と，あわせてまた本省はじめ関係各方面の惜しみない支援とを心から希求する次第である。

### 主　要　目　次

Ⅰ　図書館および語学教育研究施設の本学教育研究体制上にしめる地位，またその発展方向
　1．二つの機能的中心
　2．附属図書館
　3．語学教育研究施設
　4．図書館および語学教育研究施設の夜間利用問題

Ⅱ　建築設計上の理念的条件
　1．自由で能率的かつ快適な利用空間
　2．自学自習と知的交流に役だつ空間
　3．アカデミック・ゾーン内における図書館および語学教育研究施設の位置，各部スペースの配置
　4．その他

## Ⅰ　図書館および語学教育研究施設の本学教育研究体制上にしめる地位，またその発展方向

### 1．二つの機能的中心

一般に，大学の附属図書館はその大学における学習・教育および研究の諸活動のための機能的中心をなすものと考えられている。本学においてももとより然りといえる。

さらにいうならば，本学の現行教育研究制度において，「世界の主要言語とそれらを基底とする各国・各民族の文化を講授する」という目的（学則・第１条）に十全に対応していくことは実際上かならずしも容易でないとみられる以上，学習者みずからが自由かつ広汎な学問的渉猟をなすことによってその補充につとめることはきわめて重要な意味をもっている。その場合図書館の果しうる役割りが決定的に大きいことはいうまでもなく明らかである。

そればかりではない。本学において，各外国語を自由に「よみ，かき，きき，はなす」ための実技訓練ないしそのための基本的・専門的な実験や理論的分析などは他の一般大学におけるとは比較にならぬ重要性をもっている。そして，その場合，個々の学習者にもとめられる自発的・意欲的な演練・研究活動の意義は，これまた上述したところとすこしもかわらないのである。

しかも，そうした実技訓練を前提とする語学分野での教育研究活動は実は各外国の文化的諸形態（思想・文学・歴史・政治経済等）についてのそれとまったく不可分の関係にたつものであって，「語学」と「文化研究」とは明らかに相互補完的な関係を構成している。このようにみてくるならば，本学において図書館と語学教育研究施設とはひとしく

ともに重要な“機能的中心”を形成するのであって，それらはあたかも楕円の二つの中心ともいうことができる。

## 2．附属図書館

### A．図書館機能の変化・発展の方向

近年，内外学界一般にみられる学問研究のいっそうの専門的深化，他方それとは逆方向をなす学問の大衆化・普遍化，さらには各種学問分野間の統合・再編（いわゆる学際的学問研究の発展）等々の趨向はまことに端倪すべからざるものがある。かくしてまた，我が国の内外で生産され，流通する各種の図書・文献その他情報諸資料の質はこのところ急速に多様化してきており，さらにそれらの分量だるや年々すさまじい勢いで増大しつつある。このような趨勢はこれまでのような大学における情報諸資料の収集・管理のありかたに種々の問題をなげかけるにいたっている。

図書館自体としても，これに対処するため，まず諸資料の収集・管理の改善にいっそう努力を傾倒すべきであり，なおまた，館員の定数や図書館維持費等の増加についてもひきつづきちからをつくさねばならない。さらに，差当り移転の機会に必要な技術的改良の措置を構じておくことも怠ってはならないはずである。たとえばコンピューターによる資料検索システムや高能率の機械化収蔵装置等の導入をはかることはぜひとも必要と考えられる。同時にまた図書委員会はじめ各研究室，さらには大学当局等とも協力して，大学全体の資料収集管理方式の刷新改善に努力していくべきである。

なおまた，他大学の図書館や公共図書館その他関係諸施設との間に有効な相互協力関係，諸資料の円滑な相互利用関係等をうちたてていくことも極めて必要なことと思われる。

かくして，将来はすくなくとも関西における外国語・外国文化に関する図書・文献その他各種情報資料の収集・保管および利用の中心的役割りを荷うにいたるべきである。

### B．各種図書資料の図書館による集中管理

大学が公費をもって購入した図書・文献その他の教育研究用資料は，本来できるだけ多くの人びとの利用に供せられるべきものである。そのためには，それらの諸資料はつとめて附属図書館一カ所に集中的に保管されることが望ましい。もっとも教育研究上の必要から，それらの資料のうちの一部を各学科や講座の保管にうつすことは従来から一般的に行われてきたことであるが，このたびの学舎移転の後は各研究室が基本的には各教官の個人単位にわりあてられることになる以上，やはりそうした研究室保管分については数量は必要最小限にとどめ，また期間もつとめてみじかくすべきである。今次移転の機会に，そのことについて一定の基準を設けるようすべきであろう。

### C．貴重資料の特別保管

いわゆる稀覯図書あるいは貴重文献資料なるものについては，一般にそれらの認定基準は必らずしも明確なものがあるわけではない。つまり，一般書籍市場においてすでにそれと認定されているものは別として，特定の大学や研究機関等において教育研究上または調査活動上きわめて重要とみとめ，しかも明らかに再入手が困難とされる諸資料はやはり「貴重資料」としてとりあつかってさしつかえないのである。今後，本学においても然るべき認定機関を設けて，そうした「貴重資料」の選定を行い，また特別の保管措置を構ずることは十分必要なことである。

ともあれ，さしあたり学舎移転の機会に，すでに一般的評価の定まっている貴重資料，および例えば「石浜文庫」のような特定の個人や団体等から寄贈をうけた各種資料の収蔵保管については，その他の一般資料のなかに混在せしめることなく，特定の書庫または書架を設置して隔離保管すべきである。

### D．各種資料の利用頻度差にもとづく収蔵方法の適正化

本学が現に収蔵する各般情報資料の総点数は約30万にも達するが，それらの各個資料ごとの利用頻度については，一般図書館におけると同様，やはりそれぞれ格差があるようである。もとよりそれは当然のことであって，単に利用度の多寡のみをもってそれぞれの価値を云々するが如きはゆるされるべきもないことである。しかし，さればといって，利用度に甚しい格差のあるものをすべてひとしく同一書架に列しておくことも，日常業務の能率という観点よりするならば，やはり問題のあるところであろう。今次移転を機会に，そうした問題について何らかの妥当な解決方途を求めて検討をすすめることは十分必要なことと思われる。

なお，これと関連して，移転後の図書館閲覧室の自由接架式書架には可能なかぎり多くの図書を収納できるようすべきである。

## 3．語学教育研究施設

冒頭1の後段でものべたとおり，本学においては外国語学の教育研究のための特定施設はきわめて重要な地位をしめる。それはもはや従来一般にいわれる Language Laboratory なる名をもっては律しきれないものであり，そうした本来的なＬＬ関係設備のほか，音声学や言語学上の実験等に必要な各種の機器装置や，もともと図書館に帰属するものとされる視聴覚関係設備などをもあわせ組み，さらには外国文化の教育研究活動とも互いに補完しうるところの，多分に総合的な教育研究施設として構想されるべきものである。したがって，それはいうならば“オーディオ・ヴィジュアル外国語教育研究センター”とも名づけられるべきものであり，さらには将来そうした方向での教育研究実績のつみかさねを基礎にして，かなり特色のある研究所

の設置にまですすませるべきものと考えられる。

なお以上のような方向でこの施設の設置ないし発展を構想することが許されるならば，やはりまずその具体的な推進をはかるため，然るべき管理運営機関を設けることが必要であろう。それには現有のＬＬ委員会の強化拡充という形がもっとも妥当と考えられるが，新しい施設の運用の基本方針の確定をはじめ，さしあたり移転を契機にそこに装備される各種の機器・装置等の選定や配置についての審議決定が急がれねばならない。

さらにそれにともない，現在の図書館ＬＬ管理体制の拡充強化ないし再編についてもあわせ検討が必要であろう。

**Ｂ．視聴覚教育研究資料の整備充実**

これまで本学における「視聴覚教室」は，全体としての教室不足のあおりをうけて他の用途に転用されていたため，そこに設置されるべき各種の教育研究用機器および資料等の充実整備は今日なおきわめて不十分な状態にある。とりわけ視覚上の教育研究に必要な映像諸資料（各外国の風俗習慣，歴史上の文物遺跡，風景等，なおまた著名な演劇，音楽，映画等のフイルムやレコード，テープ等）および撮影，映写，ＶＴＲ等の諸装置においてもっとも然りといえる。今次移転にともない，本学の視聴覚教育研究施設が大きく充足されることになる以上，そうした視覚関係諸資料および機器装置の整備はとりわけ重要な課題である。学舎移転はそれらの整備充実の絶好の機会であり，前項Ａの問題とあわせとりくみ，早急に解決をはかるべきである。

## ４．図書館および語学教育研究施設の夜間利用問題

すべて図書館なるものの根本理念は要するに「奉仕」の一語につきる。本学の附属図書館や語学教育研究施設ももとよりその例外ではない。

したがって利用者の便宜という点からいうならば，それらは当然夜間も開放されるべきである。とりわけ，本学が第二部（夜間学部）を併設する以上，それらの施設について夜間の利用にもできるだけ有効に対処できるようにしなくてはならない。

しかしながら，実際問題として館員定数の限界等のため，残念ながら今日においても決して十分な対応ができているとはいえない状況にある。さらに移転後においても，施設そのものには飛躍的な拡充を期しうるとしても，それらの管理運営，つまり利用となると，率直にいってかえってむしろ制約の増大が危惧される。この点の対策について，図書館自体はもとより，大学全体としても予め十分な検討をすすめるべきである。

# Ⅱ　建築設計上の理念的諸条件

本学の移転計画の進捗にともなう図書館およびＬＬの新しい建築設計基準については，すでに早く昭和40年代のなかば以降から図書館内部において，さらには本学の施設当局関係者をまじえて，着々検討がすすめられてきた。そうした検討作業の進展を跡づける諸資料については別項「大阪外国語大学附属図書館・ＬＬ等建築設計資料集」に一括収約のとおりである。

以下にのべる設計基準はすなわちそうした一連の検討作業の最終的な結論ともいうべきものである。もっとも，設計の細部にわたってはなおすくなからず補足の余地をのこしているし，また純粋に建築技術上の必要よりする若干の設計変更は今後も当然ありうるものと予想されるが，設計の基本条件についてはこれをもって成案となすものである。

## １．自由で能率的かつ快適な利用空間

図書館は本学のすべての教官・研究者・学生および職員に対し，収蔵する一切の図書・文献その他情報諸資料を自由に閲覧し利用する権利を保障するものである。そのため，図書館はそれらの人びとに対し，可能なかぎり能率的でしかも快適な利用の場を提供するものでなければならない。

同様にまた語学教育研究施設についても，教室や実験室等に充当される部分はいちおう別として，その他の諸設備についてはやはり上述するところとまったく同じである。

## ２．自学自習と知的交流に役立つ空間

本要綱の冒頭（Ⅰの1）でものべたように，本学においては図書館や語学教育研究施設中自習関係設備の活用による正課授業の補充効果はとりわけ大きなものが期待される。したがって，それらの諸施設はすべての学生にとって教室にもとおらぬ重要な学習と研究の場となるものであり，同時にまたそれらは学年や専攻のちがいを超えて知的な交流をおこなうことのできる多彩な生活空間にもほかならない。

そのため，新しい図書館や語学教育研究施設の各部スペースは十分ゆとりのあるものでなければならず，なおまたそれらの建築様式や内装等はつとめて格調たかく，しかも明るく，開放的で親しみやすいものであることが必要である。

## ３．アカデミック・ゾーン内における図書館および語学教育研究施設の位置，各部スペースの配置

本要綱の冒頭でものべた“二つの機能的中心”という観点よりするならば，図書館および語学教育研究施設はなるべくアカデミック・ゾーンの中央部に近い地点に位置することが必要である。

（その場合，現実に新しい粟生間谷キャンパスの地理的条

件にもとづく各教室・研究室・大学会館・管理部局等各棟配置との相関関係よりして，結局図書館の適正位置はゾーン中央部の西側に，書庫・閲覧室・事務室その他一切をふくめて全三階，また語学教育研究施設はさらにその上層に教室・実験室・視聴覚教室・自習室等必要な諸設備をふくめて全二階，両者あわせて総五階の一棟として建設されることになるであろう。)

いうまでもないことながら，図書館と他の教室・研究室棟その他各棟との連絡導線はつとめて簡捷であるべきで，正面出入口のほか適宜に補助出入口を設けることが必要である。同様に，図書館・語学教育研究施設とも，各室・各設備の配置設計にあたっては十分周到な配慮が望ましく，なおその場合，図書館（ＬＬもふくむ）側の希望や意見は可能なかぎり尊重されるべきである。

## 4. その他

A．図書館閲覧室およびＬＬ教室その他における照明採光については十分綿密な配慮が必要で，図書館設計の最近の動向にかんがみるならば，むしろ人工照明を主とすべきであろう。但し，図書館棟各階中央ホール部の自然採光量はできるだけ多くすることが望ましい。

B．諸資料の収蔵および利用，また精密な各種視聴覚機器の保全および利用等をより効果的にするため，図書館棟（語学教育研究施設をふくむ）の冷暖房・空気調節等の設備，また書庫内部における炭酸ガス消火の設備等が必要である。

C．前項（Ｉの２のＡ）でものべたことであるが，図書館書庫内書架設備の機械化による資料の収蔵保管機能の強化はぜひとも必要であり，その場合，機種の選定はつとめて慎重に行い，後日に悔をのこさぬようにしなくてはならない。

D．前項（Ｉの２のＤ）でのべた図書館閲覧室内の自由接架式書架収納図書の増加にともなう選書作業は十分周到な配慮をもって行われるべきである。

なお，閲覧室退出者による備付け図書の持ちだし防止のためのチェック・システムの設置もぜひ必要であろう。

以　上

# ロシア人名辞典について

附属図書館整理係　藤　本　哲　生

昨年，当館に

**Деятели революционного движения в России ; биобиблиографический словарь от предшественников декабристов до падения царизма. Том 1-5. Под ред. Вл. Виленский-Сибиряков, Феликс Кон, А. А. Шилов, Б. П. Козьмин и В. И. Невский. Москва, 1927-34.** 請求記号283.8/6 という本が入った。近年，ドイツ民主共和国では，稀覯本の reprint が多く出版されているが，これもその一つである。この伝記附著作目録が入ったのを機会に，この本を紹介し，ロシア人名辞典にどういうものがあり，そのうちどれが当館に入っており，どれがなく，今後どれを購入すべきかにふれてみたい。

この本は書名からもうかがわれるように，18世紀末から1905年に至る期間の，政府反対の政治家・革命家の伝記と著作目録である。この種の人物を探す場合の不可欠の道具であるが，残念ながら，刊行が中止されたことにより，人物のカバー・期間について欠落部分がある。例えば，第４巻は未刊であるし，第３巻は２分冊で **А-Гм** までしかカバーしていず，以下は欠落している。しかし，未刊部分の原稿は，国立歴史図書館に保管されているそうである。

本書の構成は，全５巻が人名のアルファベット順に配列されている。即ち，第１巻が,「デカブリストの先駆者たちから“人民の意志”派まで」(全２部・完)、第２巻が,「70年代」(全３分冊・完)、第３巻が,「80年代」(２分冊，Ａ-3，以下未刊)，第５巻が,「社会民主主義者たち，1880-1904」（２分冊，**А-Гм**，以下未刊）というように時期区分されている。従って，自分が調べようとする人物が，どの時期にあたるのか，大体見当をつけて探す必要がある。全巻が出版されなかったことにより，全体の索引もないので，その点不便である。

記事は，以下のような構成になっている。①姓・名・父称・地下活動上の姓や党でのあだ名など　②出身民族　③誕生日（年月日）④社会的背景（出自）⑤出生地　⑥教育程度　⑦革命運動の発端　⑧革命運動への加入（党派）⑨受けた判決　⑩その後の変遷　⑪没年　⑫書誌的事項（著書・論文等のリスト）

また，多く肖像が載されているので，貴重である。

参考書目も巻頭にあり，より詳しく調べたい場合の手がかりにもなるし，特にそれが，単行書でなく，雑誌・新聞の記事である場合，なかなか調べる道具があまりないので，

貴重な手がかりとなる。

ロシア人名を調べようとする場合，その人物の伝記的事項にもまして，名前の力点の位置とか，形態学的な変化などに迷うものである。例えば，Иванов の力点は a にあるのか，o にあるのか，迷うものである。その時は，

Dictionary of Russian personal names. With a guide to stress and morphology. Comp. by Morton Benson. Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press, 1964. 請求記号238/33 がある。

もちろん，ソ連大百辞典にも第7巻以下は力点が姓に付されているが，この本の方がより簡便に使用されるように思う。この本は，巻頭に力点についての概説もしているし，ざっと2000の姓をかかげており，便利である。

また，筆名，変名，イニシャルなどしか分らないときは，以下の本で調べる。

**И. Ф. Масанов**

**Словарь псевдонимов русских писателей, ученых и общественных деятели, Том 1-4. Москва, 1956-60.** 請求記号 280/25

この本は，筆者等をアルファベット順に排列して，本名とどういう雑誌・新聞でどの時期に使ったか教えてくれる。

その他に，ロシア人名を調べる道具として以下のような本がある。

**Энциклопедический словаь русского библиографического институт Гранат**

**Деятели Союза Советских Социаиистических Республик и Оклябрьской революции ; автобиографии и биографи. Москва, 1929.** 350, 234, 304項目

これはあの有名なグラナート百科辞典第41巻の別出版で，1917—1927年代に活躍した人物の調査に有力な道具となるといわれている。政治的に失脚した人々の伝記などはなかなか以後の出版物では探せない場合が多いので，そういう種の人物の調査に特に役立つといわれている。これは是非とも入れたいものである。

その他のロシア人名辞典には，いろいろあるが，少数のみ紹介しておこう。

Prominent personalities in the USSR : a biographic directory containing 6,015 biographies of prominent personalities in the Soviet Union. Comp. by the Institute for the S Study of the USSR.(Munich) Metuchen, Scarecrow Press, 1968 請求記号 283/45

約6000の全分野の現存の指導的な人物の伝記。

Crowley, E. L. ed.

Party and government officials of the Soviet Union. 1917-1967. Metuchen, Scarecrow Press, 1969（なし）

党と政府の要人の伝記。

Turkevich, John.

Soviet men of science ; academicians and corresponding members of the Academy of Sciences of the USSR. Princeton, Van Nostrand, 1963（なし）

アカデミーに所属する科学者の伝記。

Who's who in Soviet social sciences, humanities, art, and government. Comp. by Ina Telberg. New York, Telberg Book, 1961（なし）

社会・人文科学・芸術等々の重要人物の伝記。

# 『法学ラテン語綱要』（柴田光蔵著）の紹介

大阪外大附属図書館　藤　本　哲　生

前略　先生，お送り下さいました新著，ありがとうございました。早速目を通させていただきました。　判例タイムズ』連載中はざっとしか目を通していませんでしたから，そんなに感じませんでしたが，今回単行書にまとめられますと，ずっしりと重さを感じました。「重さ」とは物理的価格的な意味でもそうですが（本体 302頁・別冊附録 183頁・価格 3,800円），この本に先生がつぎこまれたであろうエネルギー・熱意・時間・努力などが少しばかり推察できますので，そう感じたわけです。以下私の読後感を述べさせていただきます。(もちろん，十分時間をかけて全部読んだわけではなく，自分の関心のあるところを拾い読みした程度ですが。)

私も先生と同じく「独力で調べる手法」に関心をもっています。日本ではこういう分野がなおざりにされてきたように思います。それで，先生がローマ法の基礎をなす「法学ラテン語」で穴をうめられたことに強く同感します。私の職業としています図書館の分野でも，各図書館で仕事を具体的にどうやるのかという「スタッフ・マニュアル」がなく，新しく図書館に入った者は，各自がコツコツと経験的に失敗を繰り返し，多少の先輩の助言をえて，不必要と思われる無駄をたっぷりかけて一人前の図書館員に成長していくようです。しかし，アメリカでは新人に，ここではこういう風に仕事をやるのだと口頭でざっとしたことを説明して，あとは部厚い「スタッフ・マニュアル」を見て仕事をせよと言い渡され，翌日から一人前の仕事をするよう要求されるそうです。図書館員に対する待遇・社会的評価・図書館員の質等々日本と比較するのは無理だとは思いますが，日本でもそろそろ各図書館で自館の「スタッフ・マ

ニュアル」をつくるべき段階に達していると私は思っています。そうすれば，不必要な無駄も省かれると思います。私もおよばずながら頑張って「スタッフ・マニュアル」らしきものをつくりあげたいものだと願っています。

脱線してしまいましたが，本論の読後感に戻りまして，本書は，図書館員にとっても非常に役立つと思います。私達も時々はラテン語の本をあつかいますが，まさに「おおよそ見当はつくけれども」というところで，「正確な内容を把握する」ための「独力で調べるための手法」を教えていただいたことは非常にありがたいことです。先生に口頭で教えていただいているような対話形式でまず第一部「辞書のひき方」から教えていただけ仕合せです。図書館員にとりましては，まず最少限，辞書をひけるということがとりあえず要求されますので，正に私達にぴったりだと申せましょう。それを懇切丁寧に「実践的アプローチ」で教えてもらえましたので実に入りやすいラテン語入門だと思います。第一部では体系的系統的ではありませんでしたが，第二部で最少限度の文法が系統的に手引きしてもらえましたので，あとは自分の努力でラテン語を身につけるようにするだけです。先生のように語学学習の「ノウ・ハウ」を「はじめに」で詳しく書いて下さって，それを具体的に本文中で実践させて下さるとさしもの難解なラテン語でもやろうという気とどうにかやれそうだという気が起ってきます。41日間頑張りましょう。そして機会があるごとに本書をひもといてラテン語を身につけるよう努力しましょう。

先生，別冊附録「語尾逆引表」をつくられるのには，時間がものすごくかかったでしょう。試行錯誤をつみかさねてくふうして，何回も表を作っては改めという気の遠くなるような努力があったことと推察します。他のどんな本にも見つけることのできない先生のオリジナルなものだと敬服しています。私はまだ実際にそんなに使っていませんが，これから実際に使ってみると便利なことが実感として分ると思います。また使う者の立場からして，あの附録が別冊でなかったとしたならば再々使うには不便でしたでしょうが，さすが先生は使う者の心をよく御承知で，よく考えて別冊に製本して下さったと感謝しております。装丁もなかなかシャレていますね。カバー・表紙の色，先生らしい好みだと思います。また，愛読者カードが単に誰がどういう動機で買ったかということの調査のためでなく，「将来，補正・追加の資料を送る」ための記録としてなされる点にも敬服します。

先生のいわゆる「二重の意味での under ground」な本書は，先生の「我国の法学の発展にわずかでも寄与したい」という願いに基づいていますが，それは十分はたされることと思います。10年後を楽しみに待ちましょう。

先生，こういう立派な御本を自費で出版されましたことに心から感謝します。先生の6部作も必ずや完成するだろうし，またよりクリエイティブな御仕事も着々なされていると信じています。どうか体に気を付けて下さい。先生がテニスに卓球にバドミントンにとスポーツと勉強を両立させておられるのは承知していますから，大丈夫だとは思いますが，先生もそろそろ「不惑」を目前にされていますから，くれぐれも気を付けて下さい。　　妄言多謝

哲生拝

『法学ラテン語綱要』柴田光蔵著，xiii，302p．22cm
『別冊附録』「動詞全変化表」・「語尾逆引表」183p．22cm
（申込先）
〒606 京都市左京区田中門前町14の1
有限会社　玄文社
TEL　075（781）6863
振替　京都 3110
又は
〒　京都市左京区吉田本町
京都大学法学部研究室　柴田光蔵
（研究室申込みの場合は，格安に割引く。）

# 「キヨウキチ」国のこと　——チユクチ文献抄——

附属図書館第二運用係　平　野　　曠

「カムサスカ国の東北の方位に当り，地続にてチヨウキチといふ異国あり……近来より赤人行て隨へ国名を改易してアナアテリスコイといふ。この国に大河あり，アナアテリといふ。この河の名によって国名とせりといへり」(蝦夷草子)。

江戸時代の末期，最上徳内がロシア人からの聞書きとして蝦夷草子に書いたチヨウキチ＝チュクチは，シベリア極北部のチュコト半島，アナドイリ河流域，ヤクート自治共和国のコルイマ河下流域に住む古アジア族の一つである。ルオラベトラン（本当の人間）の自称をもっている。

パレオ・アジア語のチュクチ語とコリヤーク語とは全く同じ語の方言にすぎず，カムチヤダル語もこの二語とかなり相異するが同源に発したものといわれる。これらを一括して чукотско-камчатская группа と呼ばれる。以下はチュクチ語を中心とした文献解題である（＊印は本館所蔵）。

高橋盛孝，北方諸言語概説，三省堂，1943.

パレオ・アジア諸語の解説書，石浜純太郎氏のすすめで若い学生のために書かれた啓蒙的な入門書である。当時の

大阪外語の渡辺薫太郎氏（満洲語）やネフスキー先生の話がでている。

V. G. Bogoraz. "Chukchee". Handbook of American Indian Languages, Part 2. 1922.

アメリカ民族学協会から刊行された著者のチュクチ語の総括的労作である。ボゴラスは1890年「人民の意思」党事件でシベリアへ流刑されたが，流刑地コルィマでチュクチ語を研究した人である。

*V. G. Bogoraz. "The Chukchee." ed. by Franz Boaz. Part 1-3, Leiden : E. J. Brill, 1904-1909. 733p.

チュクチ民族誌，ジエサップ探険隊報告第7巻からのリプリントで，第1部物質文化，第2部宗教，第3部社会組織からなる大著である。チュクチ人はマラソンと相撲が好きで，雪中で裸になって相撲をとり，女も相撲をすると書いてあるのは面白い。

*И. С. Вдовин. История изучения палеоазиатских языков. 1954.

18世紀から20世紀初めまでのロシアにおけるパレオ・アジア語研究史。ボゴラスの業績について詳しい記述がある。

ソビエト時代になって，レニングラード大学が極北民族研究の中心になった。ボゴラスらによって，1931年にチュクチ語のアルファベットがつくられた。現代のチュクチ語学者としては，П. Я. Скорик, И. С. Вдовин, Г. И. Мельников, Т. А. Молл の名をあげることができる。

*Paleosiberian Peoples and Languages. A Bibliographical Guide. New Haven, 1957.

チュクチについての単行本，論文773の書名を収録した貴重な文献目録である。

*П. Я. Скорик. Грамматика чукотского языка, I. 1961.

これまでの文法の欠点は品詞分類の基準が印欧言語学の伝統的スヘマによって行われたことである。チュコト・カムチヤダル語の独特な文法構造を説明するためには，これを再検すべきであるとの立場からチュクチ語の音韻，文法の体系的記述を試みている。音韻論でアクセント，音節の問題，子音交替の特質を取りあげ，形態論において品詞分類，実詞の文法的徴標を詳述している。チュクチ語の特徴は抱合性(incorporation)，膠着(agglutination)，分析的構造といわれる。語のニュアンスを特別の接詞によってあらわすので変化表が非常に多い。

*И. С. Вдовин. Очерки истории и этнографии чукчей. 1965.

17世紀中頃から現代までのチュクチ人の歴史，民族学的研究の成果を収めている。

*П. Я. Скорик. "Чукотский Язык." Языки народов СССР. Том 5. 1968. 248-270стр.

チュクチ語のほかパレオ・アジア各語の文法，シンタクスを専門家がまとめた手頃な参考書である。

パレオ・アジア語の研究は，日本語を含めウラル・アルタイ語との関係リサーチのため開発されるべき言語学上の新しい分野であろう。

作家井上靖の「おろしや国酔夢譚」を読むと，日本漂民デンベイがカムチャツカ探険隊長アトラソフに発見されて，アナドイリへ行ったことに触れている。デンベイこそ最上徳内の伝えるチヨウキチ国への日本人入国者第1号であろう。1699年頃のことである。彼はのちにロシア最初の日本語学校の教師になった。大阪出身の商人で，村井七郎氏によれば，現在の南区谷町七丁目付近に住んでいたということである。　（附属図書館第二運用係）

# フンボルト大学図書館のこと

ドイツ語学科　村　田　　武

昨年1年間、文部省在外研究員としてドイツ民主共和国ベルリーンのフンボルト大学に留学する機会を得ました。ドイツ民主共和国にはベルリーンの国立図書館(Deutsche Staatsbibliothek)やライプチッヒのドイツ図書館(Deutsche Bücherei)など世界的なスケールの図書館もありますが、ここでは私自身が最も頻繁に利用したフンボルト大学図書館について一利用者としての経験を報告してみます。

フンボルト大学図書館は留学生をふくむ大学関係者ならば1年間有効の利用カードを発行してもらいさえすれば即日利用可能となります。本の貸出し期間は1カ月。午前中に貸出カードをBoxに投入すればその日のうちに、午後ならば翌日午前中に借り出せます。

フンボルト大学図書館の最大の特色は、19世紀いらいのドイツのみならずヨーロッパ各国のあらゆる「学位論文」(Dissertation)が製本されて収集されていることでしょう。

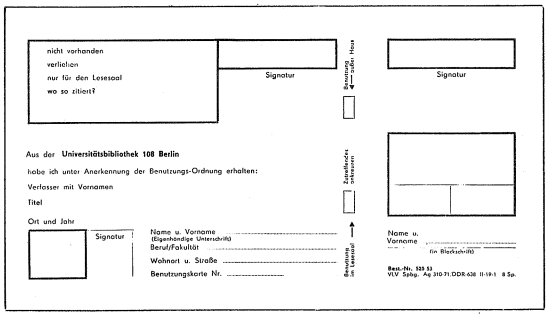
わたしが1年間、捜しまくったのは戦後東ドイツにおける土地改革に関する論文でした。学位論文の各国間（資本主義国、社会主義国を問わず）交換制度が古くから成立しており、系統的に整理されていることは、大学図書館としての重要な機能として興味深いことでした。「学位論文」の利用度はたいへん高いようで、「ただいま貸出中」ということで待たされることもしばしばでした。その場合は、返

却され次第、他の人に貸出させないという「予約」システムもあって便利です。戦争直後の黄ばんだ粗悪な紙にタイプ印刷された論文——そのほとんどは刊行されていない—を読みながら、日本ではとうてい読むことのできなかった文献を手にすることができるという留学の意味をかみしめたものです。

次に、全国の大学の「紀要」収集がこれまた徹底していることです。日本と比較すればドイツ民主共和国では大学の数が少ない（総合大学６、単科大学48）こともあり、簡単には比較できませんが、各大学の「紀要」が落ちこぼれなく収集整理されると、たいへん利用度の高いものであることを知りました。とくに「紀要」は発行部数も少なく、欠落するとお手あげのものですから、大学図書館の収集図書のトップクラスにあげるべきものでしょう。大学紀要の中には「イエナ大学学術雑誌」(月刊）のように、長大論文はサマリーを掲載し、希望者には論文マイクロフィルムを送付するという方法をとっているものもありました。

それから、もうひとつ驚いたことに、戦争直後のわずか数頁のパンフレット類なども収集されており、土地改革の生の史料を図書館でも見ることができました。(本来これら史料は図書館とは別個に整備されている文書館 Archiv に収集されるものでしょうが。)

毎日のように顔を出し、あまりに多くの本を借りだすものだから、「この外国人、ほんとうに読んでいるのか？」と怪訝な顔をしながらも、名前も聞かずに本を運んできてくれる図書館職員には Danke schön！ と礼を言うだけ。１年間の留学生活を実のあるものにしてくれたのはやはり図書館でした。　　(1977.6.23)


nicht vorhanden
verliehen
nur für den Lesesaal
wo so zitiert?

Signatur

Benutzungs-Bereich Haus

Signatur

Aus der **Universitätsbibliothek 108 Berlin**
habe ich unter Anerkennung der Benutzungs-Ordnung erhalten:
Verfasser mit Vornamen
Titel
Ort und Jahr

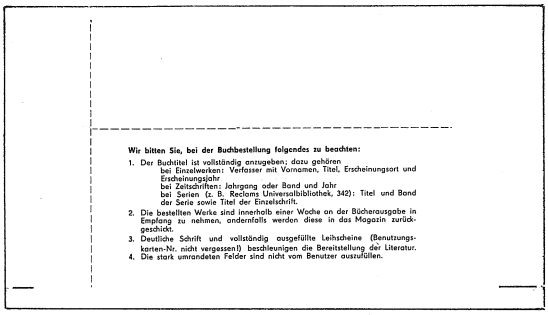
Signatur

Name u. Vorname (Eigenhändige Unterschrift)
Beruf/Fakultät
Wohnort u. Straße
Benutzungskarte Nr.

Benutzungs-Bereich Lesesaal

Name u. Vorname
für Blockschrift

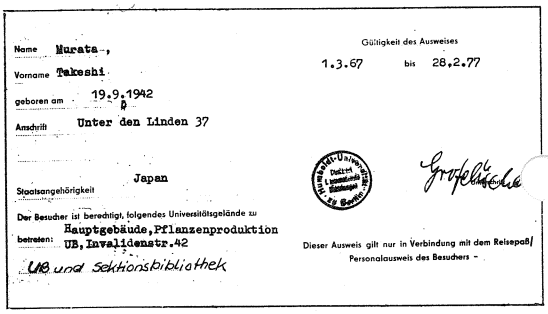
Best.-Nr. 533 53
VLV Spbg. Ag 310-71.DDR-638 11-19-1 8 Sp.


**Wir bitten Sie, bei der Buchbestellung folgendes zu beachten:**

1. Der Buchtitel ist vollständig anzugeben; dazu gehören
   bei Einzelwerken: Verfasser mit Vornamen, Titel, Erscheinungsort und Erscheinungsjahr
   bei Zeitschriften: Jahrgang oder Band und Jahr
   bei Serien (z. B. Reclams Universalbibliothek, 342): Titel und Band der Serie sowie Titel der Einzelschrift.
2. Die bestellten Werke sind innerhalb einer Woche an der Bücherausgabe in Empfang zu nehmen, andernfalls werden diese in das Magazin zurückgeschickt.
3. Deutliche Schrift und vollständig ausgefüllte Leihscheine (Benutzungskarten-Nr. nicht vergessen!) beschleunigen die Bereitstellung der Literatur.
4. Die stark umrandeten Felder sind nicht vom Benutzer auszufüllen.

HUMBOLDT-UNIVERSITÄT ZU BERLIN

BESUCHERAUSWEIS


Name Murata,
Vorname Takeshi
geboren am 19.9.1942
Anschrift Unter den Linden 37
Staatsangehörigkeit Japan
Der Besucher ist berechtigt, folgendes Universitätsgelände zu betreten: Hauptgebäude, Pflanzenproduktion UB, Invalidenstr. 42 UB und Sektionsbibliothek

Gültigkeit des Ausweises
1.3.67 bis 28.2.77

Dieser Ausweis gilt nur in Verbindung mit dem Reisepaß/Personalausweis des Besuchers –

## 編集後記

第４号の原稿を早くからいただいておりましたが，館内の事情から発行が遅れ，申し訳けなく思っています。次いで第５号を出す予定でありますが，図書館に関する御意見や御要望がありましたらどしどしお出し下されば幸甚です。

（編集子）


大阪外国語大学附属図書館〝館報〟

発　行　　附属図書館

No.4　　1977. 6

大阪市天王寺区上本町８丁目

電　話　　(06)772—1271

印　刷　　㈱セイエイ〈印刷〉

大阪市城東区蒲生２—10—33